

第24回フィロロギカ研究集会

2025年10月11日(土)

ハイブリッド開催
於 成城大学

発表要旨

カトウツルス『詩集』第64歌最終行 *lumine claro* と「見ること」について

小林新知

カトウツルス『詩集』第64歌(以下 C.64)は、ペレウスとテティスの婚礼、テセウスとアリアドネの悲恋を描き、最後に「神々と人間が和合した過去」と「退廃した現代」を対比する墮落史観的エピローグによって締めくくられる。その結語にあたる“*quare nec talis dignatur visere coetus, / nec se contingi patiuntur lumine claro.*” (407-8)において、末尾の *lumine claro* は通常「輝く(陽の)光」と解されるが、Kroll (1968)が指摘するように「目・視線」と理解することも可能である。実際、C.64には *lumen* が単数形で「視線」を意味すると考えられる箇所(86)が存在し、複数形 *lumina* も繰り返し用いられている(92, 122, 188, 220, 233, 242)。この点は、ベッドカバーの長大なエクフラシスから示されるように、「見ること」がC.64全体で重要な役割を果たしていることと密接に関わる。

先行研究として、Jenkyns (1982)はC.64を絵画作品との類比から理解しつつも、道徳的含意を否定し、詩を単なる「ダンディズム的享楽」と位置づける。一方、Fitzgerald (1995)はボスコトレカセの壁画との比較や「視線(*gaze*)」に注目し、エピローグを当代のローマのギリシア神話的過去に対する遅れ(*belatedness*)の反映として解釈する。しかし、これらの議論はエピローグそのものの読解、特に最終行における *lumine claro* の意味に十分な注意を払っているとは言い難い。

本発表は、この問題意識のもと、C.64のエピローグにおける *lumine claro* の表現を手がかりに、「視線(*gaze*)」の観点からテキストを再検討することを目的とする。具体的には、まず Fitzgerald の議論を参照しつつ、C.64における「視線」と視覚芸術的類比の機能を明らかにする。次に、*clarus* に代表される「輝かしさ」のイメージが作中でいかに展開されているかを分析する。これらを踏まえ、エピローグにおいて「視線」がもたらす主体/客体の転換が、C.64そのものを視覚芸術と類比関係に置かれた存在として読者に提示し、さらに読者自身の視線を自己へと反転させる効果を論じる。最終的には、*lumine claro* が神話世界のヒロイズムと現代の退廃を同一平面に置き、読者に両者の在り方を再考させる装置として機能することを明らかにしたい。

『イーリアス』における κλέος ἐσθλόν

——ディオメーデース、ヘクトール、アキレウスをめぐって——

大見山貴宏

『イーリアス』における κλέος (名誉) は、作品の大きなテーマの一つである。その中でも κλέος ἐσθλόν (優れた名誉) の二語は、アキレウスが戦場で得るはずの名誉として9歌と18歌に現れることで知られる。Taplin (1992)は、両歌における二語の登場に注目し、その連関に見出される詩人の技巧を論じている。しかし、この κλέος ἐσθλόν は、ディオメーデース (5.3, 273) とヘクトール (17.16, 143) が到達した名誉でもある。そのため、アキレウスが18歌で述べる κλέος ἐσθλόν は、両者との関係からも理解されるべきであり、更なる重層的効果を持つものである。本発表では、三者の κλέος ἐσθλόν について検討し、その機能を考察する。

まずディオメーデースは、アガ멤ノン体制を承認し、アカイア勢という社会に根差した戦士として κλέος ἐσθλόν を志向する。彼は敵の駿馬を奪取する武功によって κλέος ἐσθλόν を得る。これは戦士社会の目的に沿った実体的価値であり、トロイア女の嘆きをもたらす。しかし、彼は更なる戦いを続ける中、パリスの矢で射られ、嘆きに言及した脅しも失敗し、戦場を退く。

一方ヘクトールは、トロイアという社会に深く根差しており、6歌では女への恥から μέγα κλέος (大いなる名誉) を志向している。8歌ではディオメーデースの κλέος ἐσθλόν と対応する台詞を発し、17歌においてパトロクロス (アキレウス) の武具を奪取することで、κλέος ἐσθλόν と表現される μέγα κλέος が成就する。しかし、この κλέος ἐσθλόν が武勇を伴わないと非難されると、彼は更なる戦意を燃やし、ゼウスがその死を予告する。この κλέος ἐσθλόν もまた社会の目的に沿った実体的価値であり、女への恥と結びつき、アキレウスの参戦による本人の死をもたらす。

これに対しアキレウスは、アガ멤ノン体制を拒否して戦士社会から離れ、9歌では κλέος ἐσθλόν を目指さず帰郷しようとする。しかし、パトロクロス戦死の報に接すると、命と引き換えの κλέος ἐσθλόν を承認し、仇討ちを果たすと、トロイア攻略へは進まず友を弔うため引き返す。この κλέος ἐσθλόν もまた女の嘆きを呼ぶが、社会内の承認や実体的な次元を超越し、代償としての死を本人が自覚している点で特異であり、作中社会の外で成就する κλέος ἄφθιτον (不滅の名誉) であった。

κλέος ἐσθλόν のモチーフは、ディオメーデース→ヘクトール→アキレウスと引き継がれ、アカイア勢の優勢 (5歌) →トロイア勢の優勢 (8歌) →アキレウスの再出陣拒否 (9歌) →ヘクトールの武具獲得 (17歌) →アキレウスの再出陣 (18歌) という物語の重要局面に現れる。そして、モチーフの反復と深刻化を通じて、最終的にはアキレウスの特異性を際立たせる。本発表では、これらの検討を通じて、作中における κλέος ἐσθλόν の位置付けと、それを通じて示される英雄像の相違を明らかにしたい。

エラトステネース『カタステリスモイ』のエンゴナシン章における新規性について

小島 敦

エラトステネース『カタステリスモイ』は、当時知られていた星座について語った44章構成の星座神話文献である。各章は基本的に、各星座にまつわる起源譚を語る神話的記述と、各星座に位置する星々を列挙する天文的記述の二部から構成されている。本発表では、この作品の第4章、すなわち星座エンゴナシンを主題とする章に着目して、本章で採用される新規な表現を洗い出してみたい。

第4章で扱われる星座エンゴナシンは、現在のヘルクレス座に相当する古代ギリシアの星座であり、その形から一般的には「苦勞してひざまづく人物の姿」と解釈されていた。たとえば、アラートス『パイノメナ』では「τὸ δ' αὐτ' ἐν γούνασι κάμνον ὀκλάζοντι ἔοικεν（両の膝を曲げて辛苦を受けるこの像は、身を屈める者に似ている）」と表現されている。しかしながら、『カタステリスモイ』においては、星座エンゴナシンを「苦勞する人物の姿」としてではなく、「大蛇の頭を踏みつけ、棍棒を振り上げるヘーラクレスの姿」と全く異なった見方で紹介している。このような異なる見方を導入する上で、エラトステネースは本星座に対し、どのような要素や表現を新たに取り入れているのだろうか。

本報告では、エラトステネースが取り入れた新規性を論じてみたい。特に、①隣接するりゅう座との関係に用いられる前置詞、②アトリビュートと星名、③2文目に現れる ἔστηκε、の3点に着目する。また、③で扱う第4章第2文については、写本が伝える ἐναργῶς ... ἔστηκεではなく、ἐν ἀγῶνι ... ἔστηκεとする読みも提唱されており、文献学上の議論がある。本発表では、この文章を新規性を打ち出すための一文として理解した際に、写本が伝える読みがより優れていることを示したい。

これら3点の分析を通して、『カタステリスモイ』では、隣接する星座との関係性やアトリビュート、星座の形から連想される姿とはそぐわない語といった諸要素を駆使して、従来とは全く異なるエンゴナシン表現を生み出している、と指摘する。このような新規性を備えた表現によって、アラートスなどに特徴的な「苦勞して跪く者の姿」という見方を退けているのではないだろうか。

Euripides Fr.910N

大塚英樹

ὀλβιος οστις της ιστοριας
εσχε μαθησιν,
μητε πολιτων επι πιμοσυνην
μητ' εις αδικους πραξεις ορμων,
αλλ' αθανατου καθορων φυσεως

κοσμον αγηρων, πη τε συνεστη
και οθεν και οπως.
τοις δε τοιουτοις ουδεποτ' αισχρων
εργων μελετημα προσιζει.

—岩波訳—

幸せである、誰であれ、
市民たちを苦しめることにも
不正な行ないにも向かわずに、
不死なる自然の
不変の秩序を、それが何のために
どこで、どのように組み立てられたかを観想し、
探求によって知を得た者は、
そういう人々は、恥ずかしい行ないを
念頭に置くことは決してない。

αθανατου φυσεως κοσμον αγηρων は、解釈が難しいギリシャ語である。この κοσμος が、天動説の閉じた宇宙であることは、文脈より明らかであるが、二つの形容詞 αθανατου、αγηρων と属格 φυσεως の理解が難しい。エウリピデースは、コスモスを特殊な生き物と考え「老いることのない」という形容詞を使っているのではあろうか。それともこれは単に「永遠に変わらぬ」程度の意味なのであろうか。文字どおり「老いることのない」だとするなら、老いはしないが、その他の原因で滅びることはありうるとの含みをもっているのかもしれない。また φυσις には、「不死なる」という形容詞がつけられているが、これは、そもそも φυσις は死なないという認識なのであろうか。それとも通常の φυσις は滅びるが、この場合に限りて特殊で、不死の φυσις ということになるのであろうか。最も難しいのは φυσεως という属格である。可能性としては、1 性質の属格、2 所属の属格、3 主語の属格、の三つがあると思われるが、果たしてそのうちのどれにあたるのであろうか。本発表では、以上のような問題を検討し、この断片の正しい解釈を試みたいと思う。

近代日本におけるテルモピュライの戦いの物語と魯迅の『スパルタ魂(斯巴達之魂)』

泰田伊知朗

本発表では近代日本におけるペルシャ戦争の受容について検討する。特にテルモピュライの戦いがどのように文献に書かれてきたのかを見ていき、さらにこの戦いを描いた魯迅の『スパルタ魂』(1903)の制作経緯についても考えていきたい。

19世紀に入ると輸入された西洋の書物をもとにして、西洋の歴史を紹介した歴史書が日本でも著されるようになり、その中でペルシャ戦争も紹介された。また西洋の歴史書の邦訳もでき、

それらの中では非常に詳しくペルシャ戦争が解説され、テルモピュライの戦いも取り上げられた。

日本でも、国のために戦い、最終的には全滅したというレオニダスとスパルタ兵の悲劇的な物語は人々の注目を集め、やがて 1890 年ごろからテルモピュライの戦いが単独の物語としてしばしば少年雑誌に取り上げられるようになる。いくつかの雑誌は読者の教育に重きを置いており、日清戦争、日露戦争、第 1 次世界大戦と外国との争いが続く世の中で、この戦争譚が若者たちの教育にふさわしいと考えられたのであろう。

同じくテルモピュライの戦いに注目したのが魯迅である。日本留学中の 1903 年に、魯迅は『スパルタ魂』を雑誌『浙江潮』から 2 回に分けて中国語で発表した。この雑誌は浙江省からの留学生たちが中心となって東京で出版したものであった。

『スパルタ魂』のあらすじを以下にまとめる。テルモピュライの戦いにおいて、間道を通じてペルシャ軍に背後に回られたことを知ったスパルタ王レオニダスは玉砕を覚悟する。最後の決戦を前に、王は親戚の少年二人と神官を帰国させようとするが拒否される。こうしてレオニダスと 300 人のスパルタ兵が全滅した。だが幸か不幸か、目の病気のため戦列を離れていたスパルタ兵アリストダモスは生き残り、彼は戦後故郷に戻る。しかし彼の妻セレーネは夫を非難し、その挙句、彼を恥じて自殺してしまう。アリストダモスは立ち去り、その後プラタイアの戦いに参加し戦死する。その後、彼の戦死にセレーネが間接的に関わっていたことが判明し、彼女を讃える碑が立てられた。

この作品の執筆当時、魯迅の母国である清は列強に侵略されていた。彼は、清を建て直すには、レオニダスのような国を思う国民が必要だと考えたのであろう。そこで『スパルタ魂』を通じて、そのことを読者に呼びかけたのである。

さて、この『スパルタ魂』の物語はヘロドトスの『歴史』にも書かれているのだが、細部が異なる。そして魯迅が翻訳してこの作品を作ったのか、オリジナルで作成したのか、何を参考にしたのか、など様々な点に関して、日中の学者たちから多くの意見が出ている。

本発表では、魯迅が『スパルタ魂』を著した当時の時代背景も合わせて、彼がこの作品を作った経緯について考えていきたい。